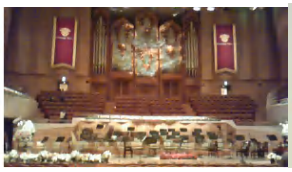
2014 年 1 月 1 日。私の音楽の幕開けは例年通りウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサート T.V.鑑賞であった。今年の指揮者はダニエル・バレンボイム氏。今年は第一次世界大戦勃発から 100 年ということでテーマは「平和」 そこで演目には『平和の棕櫚』(ヨーゼフ・シュトラウス)『もろ人、手をとり』(ヨハン・シュトラウスⅡ)などのワルツが選ばれた。また戦争に関するばかりでなく、楽団員の方々が天災に見舞われた福島を訪れ、復興を勇気づけて下さった時の映像も流れた。そして今年はリヒャルト・シュトラウスの生誕 150 年ということで、84 歳で彼が最後に指揮した曲：歌劇「カプリッチョ」から「月光の音楽」も演奏された。全体を通してアメリカ・イギリス風な印象を受けたが、時間の経過を感じさせないプログラムだった。

そして 1 月 3 日はサントリー・ホールへ「ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団の演奏を聴きに行った。指揮者は 2012 年に聴いたオーラ・ルードナー(Ola Rudner)氏。幕開けの曲は比較的珍しいレズニチェク『ドンナ・ディアナ』序曲。そして 2 曲目、3 曲目と歌のソロが続く。今年のソプラノはシピーウェ・マッケンジー(Siphiwe McKenzie)さんだったが、テノールはやはり 2012 年に聴いたメルツァード・モンタゼーリ(Mehrzad Montazeri)氏。今年は前回に増して素晴らしかった。バレエの二組のペアは昨年と同じ人たち(Katherina Bilerhart/Nikola Márová/Harald Baluch/Michal Štípa)で懐かしかった。(片方の男性が行きつけ薬局の薬剤師さんに似ている) そして第一部の圧巻は楽団のフルート奏者：ビルギット・ラムズル(Birgit Ramsl)さんによるパガニーニ(ヘルムート・ヘードゥル編曲)：カプリース op.1-24 独奏。この曲は出だしが印象的で大好きだが、全体のバランスもよく素晴らしい演奏だった。

次の第二部はスッペ：オペレッタ『軽騎兵』序曲で勇ましく始まった。そして歌を一曲挟んで、指揮者によるヴァイオリン独奏。曲はレハール：オペレッタ『パガニーニ』から序奏。高音の細い音をつなげる演奏が見事だった。またカールマン：オペレッタ『悪魔の旗手』から「王妃のグランド・パロタス(大舞踏会)」はバレエ・演奏共に印象深かった。レハール：オペレッタ『メリー・ウィドウ』の「ときめく心に唇は黙し」は、実を言うと 2011 年のルドルフ・ビーブル(Rudolf Bibl)氏指揮がとても印象深かったので、つい思い出して比較しながら聴いてしまった。『美しき青きドナウ』は、風や水、空気の流れが感じられるこの演奏は、好きなタイプの演奏である。

そして今回ふと思ったことがある。演奏者と客席の隔たり感がない。つまり空気的一体感がある。サントリー・ホールだからかな？いや、違う…。それはまずウィーンの音(柔らかい響き)だから。それは確実である。しかしその他に思い当たるとすれば〈今年の〉オーラ・ルードナー氏だからだろう。人は同じところに留まらない。またもう一つ感じたのは、アンコールの『椿姫』から「乾杯の歌」の時である。今年はアンコールの解放感というよりも、ドイツ系とイタリア系の印象の違いをグッと感じた。そしてもう一曲(日本の正月の曲)の後、ラデツキー行進曲で楽しく終演した。(2014.1.3)



今年のテーマ・カラーは緑。開演前の譜面台も緑に彩られていました。